梅花流詠讃歌でつづる瑩山禅師の一代記

『常済の光』

（令和5年11月17日に行われた「禅を聞く会」にて披露）

令和6年8月1日
第 53 号
発行　梅花流師範・詠範の会
会長本間雅憲
題字　初代会長・故加藤信三師
編集者（広報部）近藤俊彦
印刷所（資）由利印刷

梅花流師範・詠範の会事務局
倫勝寺（能代市）山田卓爾
TEL 0185-58-2302

秋田県の梅花力

曹洞宗秋田県宗務所 所長
山本郡藤里町・月宗寺（げっそうじ）住職
袴田（はかまた） 俊英（しゅんえい）

秋田県宗務所長を拝命して、はや一年半が経過しました。コロナ禍で活動がかなわなかった三年は、秋田県の梅花流にとっても大きなダメージでした。しかし、令和四年からは秋田県奉詠大会やその他の諸行事も再開され、そこに参加していただいている皆様の熱気は少しも衰えていないと感じています。

立場上、県内の寺院法要に出席するのですが、法要の中で梅花流詠讃歌がお唱えされることがあります。その瞬間、本堂内の空気が一瞬にして変わるように感じているのは私だけではないと思います。慶事の儀式は晴れやかに、弔事の時にはしめやかに、そしてどちらも厳かな雰囲気を生み出します。梅花の持つ大きな力の一つがここにあるといえるでしょう。

もとより、厳かさは不断の詠道精進よりきたるところであります。県内には、正伝師範の東泉寺東堂・柴田弘一老師はじめ、一級師範が三名、特派師範が三名と、錚々（そうそう）たる指導者が揃っています。この他県垂涎（すいぜん）の環境の中、益々のご研鑽を願い、また梅花事業により一層のご協力をお願いいたします。

最後に鬼の笑いだすような話をひとつ。来年度の梅花流全国奉詠大会は、五月十五日に沖縄で開催されることに決まりました。戦後八十年の節目に当たり、慰霊を重視した旅程を組みたいと考えております。遠路ではありますが、多くの方のご参加をお願いいたします。

今後とも梅花流詠讃歌に関することのみならず、宗務所行事にお力をお貸しいただきますようお願い申し上げます。

曹洞宗秋田県宗務所

QRコード

スマートフォン等で読み取ると、『常済の光』（令和5年6月21日に行われた東北管区予修法要の様子）の動画と当日配布のPDF資料がご覧いただけます！

『常済の光』

梅花流詠讃歌でつづる大本山總持寺開山太祖瑩山紹瑾禅師の御生涯

◆開　催　日：令和五年十一月十七日（金）午後二時より（約三十分）
◆開　　場：秋田キャッスルホテル・四階「放光の間」（秋田市）
◎総　都　管：佐藤俊晃
◎都　　管：浅田高明
◎詠讃師（師範）：清水道広、鈴木泰賢、松井祐司、渡邊英心、本間秋彦
◎詠讃師（詠範）：佐藤文、小澤兼子、嶋森順子、浅田依子、深川典子
　清水恵美子、岩舘香央里、桑名佳子、佐藤房子

※写真は全て曹洞宗秋田県宗務所様よりご提供いただきました

の御生涯を梅花流詠讃歌を通してお伝えした「常済の光」を勤めました。両会とも無事円成し、参加した皆様からは好評をいただきました。特に管区集会後には、法要の様子を聞いた各県の方々から、記録動画はないかと多数の問い合わせがあり、反響の大きさが伺い知れました。法要では瑩山禅師様の御生涯を伝えられたことは勿論、企画・台本の佐藤俊晃先生のお考えで、總持寺にて毎日朝課で勤められる、大般若転読によるご祈祷と大悲真読（大悲呪を非常にゆっくり読む読経法）を取り入れ、總持寺らしさも十分表現できたのではないかと思います。この法要を終え、改めて梅花流の可能性を感じたと共に、リハーサルを重ね、師範・詠範で智慧を出し合い、力を合わせて作りあげた事でも梅花の有り難さを改めて確認いたしました。

總持寺様では、今年一年を通して大遠忌に因んだ法要が勤修されます。機会がありましたら是非ご本山にもお参りいただき、千畳敷の大祖堂での大法要を経験していただきたいと存じます。

大遠忌随喜最中に

由利本荘市・龍門寺住職　浅田高明

本年は太祖瑩山禅師様の七百回大遠忌の年です。この原稿を書いている場所は大本山總持寺様の大祖堂の地下・瑞應殿です。そう、現在大遠忌法要のお手伝い中です。

毎日沢山の焼香師をお勤めする方丈様が上山し、それぞれの法要の導師をお勤めになられ、二十一日間に渡る遠忌が厳かにお勤めされております。この勝縁に随喜させていただいている有り難さを感じております。が、随喜が両班寮ということもあり、足の痛さに半泣き状態で、自坊に帰れるまであと何日と指折り数えて過ごしております。

さて、昨年六月の管区集会、十一月の禅を聞く会に於いて、瑩山禅師様

法螺貝の吹奏が法要の始まりを告げる（村松良周師範）

大般若経の転翻（てんぽん）

黒衣を纏った殿行（でんなん）が大般若経を運ぶ

「常済の光」に参加して

能代市二ツ井町・清徳寺住職　鈴木泰賢

六月の管区集会で行われた「常済の光」を客席から観覧させていただきましたが、その時の感動は今でもはっきりと覚えております。しかし、その後十一月に行われた「禅を聞く会」でまさか自分があのステージに上がることになろうとは全く予測もできず、依頼を受けた際には戸惑うばかりでしたが、断り切れずに引き受ける羽目に。

心配した通り「見る」と「やる」とは大違い。実際に慣らしや打ち合わせを重ねると細かな所作やタイミングを図るのに一苦労し、引き受けた事を後悔しましたが時すでに遅し。「まぁ、何とかなるか…」と本番に臨みました。大きな会場と沢山の聴衆の方々に圧倒されつつも、他の師範・詠範さんに助けていただきながら何とか大役を終えることができました。本番中は只々必死で、「法悦」などという言葉とはかけ離れた心境でしたが、思い起こしてみると、あのステージの一員として参加できたことは大きな喜びとなりました。

今回、このような機会をいただいた事、そしてこの度のご法要にご協力いただきました全ての方々に感謝申し上げます。

般若心経読誦

維那・猪股尚典師／太鼓・鷹照悟堂師／堂行・奥山一英師

「常済の光」に参加して

大館市本宮・本宮寺寺族　佐藤房子

六月二十一日の管区集会、そして十一月十七日の禅を聞く会で行われた「常済の光」に参加できたことを嬉しく思います。今までこのような法要を見聞きしたこともなく、初めての経験でございました。「常済の光」は秋田県オリジナルの音楽法要とのことで、それも当然のことと驚きと共に納得致しました。

大般若経を勢いよく繰り広げるさま、轟く太鼓の音、ゆっくりと独特な節回しで読まれる「大悲心陀羅尼」のお経、その全てが身体中に沁み通る思いでした。更に詠讃歌を組み込み、瑩山禅師様の一代記をこのようにプロデュースされた俊晃先生の凄さに感服致しました。法要に参加できた喜びは一入ですが、一観客として客席で味わってみたかったという思いもあり、とても贅沢な願いだと笑ってしまいます。

今回お世話になった師範・詠範の皆様には心より感謝申し上げます。

師範・詠範によるお唱え

詠範によるお唱え

梅花のふるさと

～詠讃歌の生まれた風景〈その三十一　達磨大師御詠歌・廓然〉

花開いて世界起こる（二）

インドから中国へやってきて禅の教えを開いた達磨大師、その本師である般若多羅尊者、そして達磨大師の弟子であり、禅宗二祖として教えを受けついだ慧可大師、さらに三祖、四祖、五祖と次第して禅の教えを大成する六祖慧能禅師。この初期禅宗の祖師たちが、それぞれのさとりの言葉を花に託して言い表してきたことを前回述べました。その源とも言うべき般若多羅尊者の言葉が、

花開いて世界起こる（花開世界起）

というものでした。花開くことによって新しい世界が始まる、このイメージが禅の伝統に流れていたのです。

「廓然」の作詞者・赤松月船師がこの詩を作る時に踏まえていたものもこのイメージでした。ここからは「廓然」の意味を考えるもう一つの大事な前提として、道元禅師の「花開世界起（花開いて世界起こる）」の教えを見てみましょう。

◇　如浄禅師と梅花　◇

道元禅師の代表的な著作に『正法眼蔵』という大著があります。全部で百巻近くになるものですが、その中に『正法眼蔵梅花』という一巻があります。そこには道元禅師の本師、中国人僧・如浄禅師が梅花について述べた言葉が数種類採り上げられ、それぞれに道元禅師が自分の考えを述べています。それは植物や観賞物としての梅の花のことを言うのではなく、禅の教えが梅花としてあらわれている、もしくは梅花の姿そのものが禅の教えであるという、独特な内容なのです。その一部をここに紹介しましょう。まず如浄禅師の言葉です。

天童山の仲冬（旧十一月）の第一句は、
〈槎々たり牙々たり老梅樹〉である。
その老梅樹にたちまちに、一花二花、三四五花、無数花と花が咲く。その清らかさと香はあえて誇るべくもない。花が散ると春の姿となって新芽を吹き、修行僧一人ひとりは剃髪の頭。ものすごい勢いで襲い来る狂風暴雨があり、大地には漫々と雪が満ちている。老梅樹はなんとも手出しのしようがなく、寒さに凍えてこすれば酸い匂いが鼻をつく。

（原文）
天童仲冬の第一句、槎々たり牙々たり老梅樹。たちまちに開花す一花両花、三四五花、無数花。清誇るべからず、香誇るべからず。散じては春の容となりて草木を吹く、衲僧箇々頂門禿なり。驀劄に変怪する狂風暴雨あり、ないし大地に交衽てる雪漫々たり。老梅樹、はなはだ無端なり。寒凍摩さとして鼻孔酸し。

天童山は如浄禅師が住職を務める天童山景徳寺のこと。ここで修行僧たちに仲冬にちなむ一句を示します。「槎々たり牙々たり」とは、梅の枝がごつごつととがって入りくんでいるようす。その枝にぽつぽつと梅の花が咲いたかと思うと、たちまち次々と咲き始め無数の花がいっせいに咲く。その老梅樹の姿は何かに較べて誇るような相手さえいらない（ほどすばらしい）。花が散ると春が訪れ、修行僧の頭は若芽のように清々しい。激しく厳しい天候にもまったく揺らぐことがない。梅が力強く寒気の中にその清香を発している。およそこのように意味を取ることができるでしょう。寒中に毅然として姿を現す梅の老木、如浄禅師は

そこに自分自身の、そして天童山に集う修行僧の姿を重ねているのです。

◇　道元禅師と梅花　◇

そして如浄禅師の言葉を受けて道元禅師はさらに「梅花」の世界を展開するのですが、その一節は次のようです。

老梅樹の「忽開花（たちまちに開花す）」の時は「花開世界起」であり、花開世界起の時節はとりもなおさず春の訪れである。この時節に「一花」がある。この「一花」の時に、三花、四花、五花があり、百花、千花、万花、億花があり、ひいては無数花がある。これらの「花開」は、みな老梅樹の一枝無数枝の「誇るべからざるところ」である。（中略）一切の花開は、老梅樹のめぐみである。（中略）百千花を人間界・天上界の花と称する。万億花は仏祖の花である。この時節を諸仏がこの世に出現される時節と喚びなすのであり、達磨祖師の「本来茲土＝〈われ〉本この土に来たる」と喚びなすのである。

如浄禅師のいう梅花がたちまちに花開くようすを、道元禅師は「花開いて世界起こる」ことだと述べています。さらに老梅樹の花満ちあふれるときこそ、み仏たちがこの世に現れるときだと言うのです。そしてそれこそ達磨大師が言われた「われ本この土に来たる」ところだと言うのです。

すでにお気づきのように、道元禅師は前回ご紹介した般若多羅尊者の言葉と、達磨大師の言葉「われ本この土に来たる。法を伝えて、迷情を救わんとなり。一華五葉に開き。結果自然に成ず」を踏まえていることがわかります。おそらく如浄禅師も同じように二人の言葉を知っていたのだと思いますが、道元禅師がその意味をより明らかに説明したと言えるでしょう。

如浄禅師の言葉では、厳寒の中、誇らしげに花開き清香を放つ老梅樹に禅僧の姿が重ね合わされていたのですが、道元禅師はそこにさらに重ねて般若多羅尊者―達磨大師にさかのぼる禅の世界の表現を描き出したと言えるでしょう。

◇　花開くひとすぢの道　◇

さて「廓然」の歌詞に戻ってみましょう。

「伝えましうけつぎ来たり有難や」。これまでのことを踏まえれば、伝え受けついできたのは般若多羅尊者であり、達磨大師であり、そして二祖慧可、三祖、四祖と次第して如浄禅師、道元禅師に至り、さらにそれ以後も伝えられ現在に至る禅の祖師たちと言うことになります。

そして伝えられてきたものは何かというと、「花開世界起」という言葉に託された禅のおしえ・禅の世界ということになります。その表現はたとえば達磨大師においては「一花開五葉」と表されました。表現は違いますが、それが指し示す禅のおしえそのものは変わらないものです。だから「五葉に開く道」とは、達磨大師の言葉を借りればそう言えるということであって、般若多羅尊者に言寄せれば「花開世界起の道」と言えるし、如浄禅師に言寄せれば「老梅樹の姿」とも言うことができるのです。

このように代々受けつがれたおしえはまっすぐに（よこしまな混じりけなく純然として）道元禅師へ伝えられ、今日へと伝えられました。それゆえ「ひとすぢ」と言うのです。「道のひとすぢ」と言うと、複数の道の中のどれか一つ、と勘違いしそうですが、ここは「ひとすぢの道」の言い換えと受けとめた方がよいでしょう。

前回、「廓然」は達磨大師その人だけに関わる御詠歌ではなく、梅花流の根本的なおしえに関わるものと述べたのは以上のようなわけでした。

祝 清水道広師 梅花流一級師範補任

令和五年十二月十二日、特派師範の清水道広師が梅花流一級師範に補任されました。県内若手梅花流指導者のエースとして、今後益々のご活躍が期待されます。この度、同期のご友人・上本師範からも特別にご寄稿いただきました。

祝賀会の様子
（令和6年5月27日・秋田キャッスルホテルにて）

明るく楽しく梅花流

北秋田市鎌沢・正法院住職　清水道広

そもそも考えも及ばなかった事ですが、数名の師範から背中を押されその気になり、少し高めのテンションのまま先生方にご相談申し上げ検定表を提出しました。ただ、令和一年に浅田先生から一級合格の朗報を頂戴した際に、「浅田先生なら大丈夫」と言われた事へのプレッシャーを伺い、さらに「いつかその時が来たら、道広さんなら大丈夫って言ってあげるね」というお言葉にゾッとしましたので、検定のことはなるべく口外せずに、静かに臨みました。「〇〇さんなら大丈夫」という心温まるお言葉は、私にはとても耐えられませんので。とにかく作法・詠唱、共に細部までこだわってチェックし、不出来を痛感しました。確かに稽古はしましたが、努力不足だったのではと自問自答を繰り返しております。常にスタート地点、ここからまた励んでまいります。梅花人口減少が囁かれておりますが、なんのその。かならずまた盛り上がる日が来ると信じています。今はとにかく稽古を重ね、梅花流を楽しみたいと思っております。

末筆乍ら、日頃ご指導を頂戴しております柴田先生始め諸先生、一緒に梅花流を楽しんでくださる講員様に感謝申し上げ擱筆致します。

清水道広さん、一級師範補任によせて

愛媛県今治市・観音寺住職　上本英昭

道広さんと私は第十六期梅花流師範養成所の同期です。後から顧みるとそんなことはなかったのですが、三十五歳で入所した私は「この歳では知り合いもいないし、皆さんと心を寄せ合うのは難しいかな…」そう思っていました。極めて過密な研修の日々をこなす中、あるときスーツと極めて軽やかな様子で、フレンドリーに話しかけてこられたのが道広さんでした。とても綺麗な標準語を話す彼ですが、涼やかな笑みを浮かべながら少し話しては去り、またスーツと近づいてはまた去っていく。まるで子猫ちゃんのようにふるまう彼の様子に、私はいつの間にか心がほぐされていたのでした。

養成所でのひと場面ですが（怒られるかな…）、ベッスにマジックで線を入れてタビに変えてしまう可愛らしい一面もある道広さん。それでいて彼はとても宗乗（曹洞宗の教義）に長けておられます。さぞ講員さま方も楽しく、かつ頼もしく御詠歌を楽しんでいるに違いないと想像に難くありません。

そんな道広さんも今や一級師範。昨今の梅花も難しい時代ではありますが、「梅は寒苦を経て清香を発す」。必ずや「**道**を切り開き**広**めて」くださるとご期待申し上げます。共にキバリましょう！おめでとうございます！

安田光彰先生を囲んで

講習の様子

「慶祝御和讃」のお唱え動画でお祝い

チョットぶじょほう　第24期梅花流師範養成所レポート

東京港区芝にある曹洞宗宗務庁では、二年毎に梅花流師範養成所を設置し、熱意をもって梅花に取り組む若手師範を育成しています。本来であれば四泊五日の講習を二年間で六回重ね、全国から集まった仲間と朝から晩まで梅花漬けの日々…のはずが、コロナに翻弄された前期より引き続き、養成所の開催形態も大幅に変更を余儀なくされているようです。

今回、第二十四期養成所を無事終了したお二方に貴重な感想を寄せていただきました。

梅花流師範養成所を終えて

湯沢市柳町・東山寺副住職　柿崎隆仁

「うちのお寺では梅花をやらなければ住職になれない」と住職から言われ、私は梅花を始めました。もちろんそんな決まりはありませんが、修行を終えたばかりの私は訳もわからず梅花を始める事となりました。秋田に帰ってきて二日後から宗務所の養成所に入所し、今年で七年になります。元々人見知りの性格でしたので、最初の講習の日は不安でとても緊張した事を今でも覚えております。

令和四年より二年間、ご縁をいただき宗務庁で行われる梅花流師範養成所に通わせていただきました。私たち第二十四期は新型コロナの影響もあり、本来四泊五日の日程で行われる講習を二泊三日で行うこととなりました。日数は少なくなりましたが少人数の班に分かれての講習となり、一人一人講師の先生から指導をいただきとても充実した二年間でした。

現在、当寺では梅花講の活動を休止していますが、今後再開したいと思います。養成所の先生方から学んだ事を多くの人に伝え、弁道精進し長く活動を続けて参ります。

最後になりますが、県内御寺院様をはじめ全国の曹洞宗御寺院様の協力があり、今回本庁養成所で勉強する事ができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

自己研鑽に励んでおります！

その背中を追いかけて

由利本荘市花畑町・東林寺副住職　佐藤龍道

私はこの度、東京都の曹洞宗宗務庁（以下、本庁）にて行われた第二十四期梅花流師範養成所に行かせていただきました。

本庁の養成所のお話をいただいたのは、秋田県宗務所の梅花流師範養成所に通い始めて二年が過ぎた頃でした。その当時の私はまだ勉強したことのない曲が多くあり、打鉦・鳴鈴をはじめとしたお唱えの作法や旋揺法にも不安がありました。また、県内にはまだ本庁の養成所に行っていない師範の方がいらっしゃる中で、本当に私でよいのだろうかという思いがありました。そんな中、私が本庁の養成所に行かせていただこうと決めた一番の理由は、秋田県宗務所・禅センターにて行われた梅花流宗務所講師等研修会でした。この研修会では、県内の若手の梅花師範の方々が短い持ち時間の中で実演を伴った曲の解説をされておりました。その実演解説を聴講した際に、その素晴らしさに感動し「この先輩方のような梅花流師範になりたい」と梅花を勉強するモチベーションをいただき、本庁の養成所へ行かせていただく事を決意致しました。

本庁の養成所では二泊三日の間、朝から晩まで梅花漬けの時間を宮崎県の久峩先生を主任講師に前期・後期各三名の素晴らしい特派の先生方と過ごさせていただきました。

本庁での講習を糧に、今度は私が後輩の指針となるような梅花師範になれるよう今後も研鑽を積んでいきたいです。

講員さんと楽しく講習中！

梅花流詠讃歌でつづる大本山總持寺開山太祖瑩山紹瑾禅師の御生涯

『常済の光』

「常済の光」に参加して

大館市・玉林寺寺族
桑名佳子

法螺貝の響き、太鼓の音、荘厳な読経に鐘の音。静かに染み渡るような語りに導かれ瑩山様の生い立ちや偉業を称える御和讃や御詠歌が唱えられる。まるで一編の映画を観ているようでした。その中に自分も参加していることが不思議でもあり、この上なく幸せに感じました。そして、瑩山様がお生まれになる前から仏様のご縁に導かれていたように、私達もそれぞれに貴重なご縁に支えられてここにいることに気付かされたのです。

この「常済の光」をお創りになられた方丈様に初めて法具の解き方からご指導いただいたこと、今までご指導いただいた諸先生方やいつも一緒に楽しくお稽古して下さるお仲間達、私の拙い指導を楽しみに集まって下さる講員さん達など、数々のご縁に支えられて梅花流を続けられていることに改めて感謝の念が溢れました。

瑩山様が生涯をかけてご尽力なさった仏の教えを広めることを、微力ながら私も梅花流を通して実践して参りたいと思います。

～テレホン梅花～

◎平成六（一九九四）年発行の「同行」第九号から掲載が始まり、約三十年間お届けして参りましたテレホン梅花も、大変残念ですが今年十月いっぱいを以って終了となります。柴田先生、長い間誠にありがとうございました。柴田弘一正伝師範の貴重なお唱え、どうぞじっくりご堪能ください！

☎〇一八（八七三）七六七六
【毎週土曜日にテープが更新されます】

【令和六年】

◆七月
六日　開山忌（和讃）
十三日　真清水
二十日　影向（和讃）
二十七日　伝光

◆八月
三日　盂蘭盆会（和讃）
十日　新亡精霊（和讃）
十七日　平和祈念（和讃）
二十四日　道心利行（和讃）
三十一日　同行（和讃）

◆九月
七日　讃仰（高祖・和讃）
十四日　讃仰（高祖・和讃）
二十一日　法灯（太祖）
二十八日　法灯（高祖）

◆十月
五日　報謝（和讃）
十二日　道交
十九日　伝心
二十六日　浄心

〒010-0111　秋田市金足岩瀬字前山３　東泉寺　TEL018-873-2675

～編集後記～

大変お待たせいたしました。昨年十二月以来、皆様のお手元にようやくのお届けとなります（涙汗）お忙しい中ご寄稿くださった方々には心より感謝申し上げます。

テレホン梅花終了は同行にとって一大事であります（涙）柴田先生御本人による音源、その都度吹き込み更新され実は記録として残っておりません。一期一会のお唱え、十月まで味わって拝聴しましょう！

同行に新風四コマ登場！ねこと梅花の出会い、今後の展開が気になりますね。読者皆様にほっこり笑顔のひと時をお届けできたら幸いです！（俊彦）

投稿・感想等々、大歓迎です！
〒018-0604　由利本荘市西目町沼田字敷森27　円通寺（近藤）　☎0184-33-3049